凡例

・以下は、"Introduction to Philosophy"（Gendlin, E.T. 1998）の翻訳である。
・原文は、The International Focusing Institute ウェブサイトの Gendlin Online Library で公開されている（2019 年 11 月 17 日現在）。
http://previous.focusing.org/gendlin/docs/gol_2168.html
・原文の太字（例：**content**）は、訳文では傍点を付加し表記している（例：内容）。
・原文の“　”は「　」を以て表記した。
・文中に挿入されている[　　]の短い補注は、訳者による。

哲学への序説 Introduction to Philosophy

ユージン・T・ジェンドリン
（訳・西岡良洋）

ソクラテス

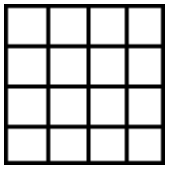
ソクラテスが召使に幾何学を見せている。ソクラテスは砂上にこのような図形を描く。

「ほらごらん、小さな正方形４つ入りの、２単位(ユニット)大の正方形。」

そこでソクラテスは召使が気づくよう問いかける。「どちらの辺も長さは２だ。上の行からは２個正方形がとれる。でも、辺の下の方も同じく２単位あるから、さっきの上のとは別にもう２個正方形がとれる。だから、ここには小さな正方形が全部で４つ入っているわけだ、そうだね？」

ここでソクラテスは、召使に頼む。この正方形の２倍の広さの正方形を書いてほしい、そして８個分の正方形を含んだものができるようにしてほしい、と。召使は、自分が答えがわかっている know と思って、２倍の長さつまり４の長さの辺を書くよう言う。しかし、二人が４の長さの辺の正方形を書いてみると、次のことを発見したのだった。

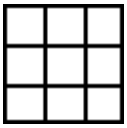
「ほらごらん、小さな正方形１６個入りの、４単位(ユニット)大の正方形。」



数えてみて、二人には次のことがわかった。一番上の行には４つの正方形があること。そして辺にそって４層が積み重なっていること。したがってこの正方形には全部で 16 の小さな正方形があること。

ここで召使は、４では大きすぎるということを理解し、「では３です」と回答する。すると今度はこうだった。

「ほらごらん、小さな正方形９つ入りの、３単位(ユニット)大の正方形。」



数えてみると、9個の小さな正方形が入っている。ここで召使は事態を飲みこんだ。縦横２単位大の正方形の２倍の広さを得るためには、３ではもうすでに大きすぎるのである。ソクラテスが再度質問を繰り返したこの時、召使は言ったのだった。「僕にはわかりません I don't know」。

ソクラテスはここで、これまで様子を見ていたメノンに向かって尋ねる。「この召使は今、彼がわからないというその事柄 what he does not know に関して、だいぶいいところまで来ているんじゃないだろうか？」。

ここで重要なのは、この召使は答えがわからなかったということだけではなく、それと同時に彼にはまさにわかっていたということである。その答えは２より大きいものであり、なおかつ３ではすでに大きすぎ、よって答えは２と３のあいだにあるのでなければならないというそのことを。「僕にはわかりません」と言った時、彼はただ、空くじを引いていたのではなかった。そうではなく、彼は、答えについての意味感覚（フェルトセンス）felt sense を持っていたのである。

「僕にはわかりません」。そう述べる代りに、召使はこのように言ったかもしれない。

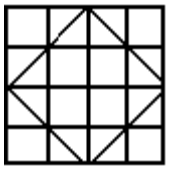
「わからない.....あー、んー.....」。

あるいは、召使はこの「.....」から語り、このように言ったかもしれない。

「答えが２と３の間だということはわかっているんです。でもソクラテス、そのことを言うための方法が無いんです、だって２と３の間には、数字が無いんだから！！」

召使はわかってはいた。しかし彼がわかっていることは、彼が言い得ることを超えていた。このことは、それ[「彼がわかっていること」]を言うのが単に不可能であるが故ではない。そうではなく、彼はそれをありきたりな usual 言葉や数では、言うことができないのである。彼の「.....」から先へと進んでいくために、人はそういう事柄を言うためのありきたりなやり方を変えなければならない。「８の平方根」と言ったような新しい術語を案出するか、あの小さな箱（ボックス）たちを解体 break up しなければならない。

そこでソクラテスは、小さな箱（ボックス）たちのいくつかを分解するならば、新しい正方形を作ることができることを示している。この新しい正方形は、16 の箱（ボックス）を含む大きな正方形の四分の一サイズの正方形の、その対角線を辺とする正方形である。



前に、メノンはソクラテスに次のような難問を投げかけていた。「もし私たちが或る何かについて、すでに知っているのでないのならば、いったいどうやってそれを尋ね求めることだけでもできるのだろうか？　［いや、すでに知っているのでないのなら、尋ね求めることすらできない。そうすると、］私たちは、私たちが尋ね求めているそのことを、知ることはないであろう。また反対に、それについてすでに知っているとするならば、何ゆえにそれをあえて尋ね求める必要があるというのか？　［いや、その必要はない。］だからこのように思われる。我々は何事も探求することなどできない。なぜなら我々はそれを知っていなければならず、かつそれを知っていないのでなければならないのだから」。ソクラテスは次のように言うことによって、この難問に答えている。すなわち、魂はかつて前世の生を送っていたのであり、すべての事を知っている、そして我々が必要とするのはただそれら知っていることを「想い起こす recollect」ことだけなのだ、と。

あの召使が「僕にはわかりません」と言ったとき、ソクラテスはそれが一体いかようなことであるのかを示したのだった。つまり、私たちは、ある仕方では知っている、しかし別の仕方では知らないということ。それは、知ってはいるが、まだ定式化する formulate には至らない時、召使がそこに持っているものだ——それは私たちが単純に知っている以上の、ある種の知 knowing であり、無知 not knowing なのである。

ソクラテスはただ召使に誘導的な質問を投げかけていただけだったから、召使は自ら次のことを実際に理解した。「２では小さすぎるし、３では大きすぎる。だから、これ以上数字を提案するなんて無意味だ」。無論私たちは、これを機械的な学習ではなく、「優れた教え」であったと言うであろう。しかしソクラテスはここでメノンの方を向き、そして尋ねるのである。「いったい誰がいまだかつてこの召使に幾何学を教えたことがあっただろうか？　この子は、生まれて以来、君の家でずっと暮らしている。だから君は確かに知っているはずだ」。メノンは言う、「いいえ、誰もこの子に幾何学を教えたことはありません」。ソクラテスは尋ねる。「では、君は同意するかね？　この子の魂が、前世においてすべてを学習したに違いないということを、そしてその結果、この子は今しがたただそれを『想い起した』に過ぎないということを？」。メノンは言う。「どういうわけか、あなたの言っていることが正しいよ

うに思います」。さて、しかしソクラテスは言う。「私自身は私が今言ったことを誓いを立ててまで断言しようとは思わない。でも私たちは、未だ知らざるものに向けて探求することが可能だし、また探求するべきであるということは、確かなように思う」。（[プラトン『メノン』]86b）

想起説 the myth of recollection は、内的に立ち出でる私たちの或る能力、すなわち一層、より一層と理解をすすめていく我々の能力を指し示す、ひとつのやり方なのだと言うことができる。知か無知かという先の難問は解消する。なぜなら私たちは、私たちの知っているものの辺縁(エッジ)edge で思考することができ、そこへと入っていくことが可能であるから。

プラトン

哲学は私たちがものごとを言うための現存の方法に対して疑問をなげかける。

哲学は、辺縁（エッジ）——ありきたりの方法で言うことのできる以上のことを、私たちが知っているその場所——へと至る思考を私たちに許してくれる let。

私たちの言い得ることの辺縁（エッジ）にある、言葉以上の知からさらに思考を進めるためには、ありきたりの概念や構成単位（ユニット）を解体し break up、新たなそれを来たらしめる let new ones come 必要がある。

辺縁(エッジ)から先へと進んでいくために、またこれを言うための新たな方法を案出するために、人は当然ながら、以前と同じなじみの言語、以前と同じなじみの英単語を用いなければならない。しかし、哲学は同じなじみの語を用いるが、その語が、何かそれ以上のこと、何か新しいことを言い、意味するようなさしめる let のである。各々新しい哲学というものは、主要な語の位置づけを再度やりなおす reposition。

プラトンは辺縁（エッジ）で考え続けた。プラトンは何かに定義を与えては、その定義がどうしても効力を発揮することができないような事例を示したものだった。例えば、誰かがあなたのところに、護身用の武器を置いていったとする。数か月後、その人がやってきて、その武器を返してほしいと頼む。さてそれを返してあげるのは、公正であり、正当なことだろうか？　然(イエス)り。なるほど結構だ、でも、もしその人が見るからに凶暴で、まさに今、怒りに気が狂っていたとしたら？　もしここで武器を返してしまったなら、あなたはその人に害を与えることになる。このことは公正かつ正当なことだろうか？　そして、あなたのことを信頼して物を置いていった人の財産を返すことが、公正で正当なことでないとするならば、いったい何が公正で正当なのだろう？　今、またも私たちは、私たちが知っていることの辺縁(エッジ)で思考している。プラトンはこうした類のことを、ほぼすべてのページで行っているのだ。

辺縁(エッジ)の上で考える時、私たちの概念や定義は変わり続けるが、このことは、真理 truth などありはしないのだ、ということを意味するのではない。そうではなく、辺縁（エッジ）に立つ時、私たちは、今のところ言い得る以上のことを知っているのであって、言い得る以下のことしか知らないのではない。ソクラテスとプラトンにはわかっていた。人々の知っていることが、自身の持っていた定義を瓦解 break down させるとき、人びとは気付かずにはいられないのだということを。ソクラテスはしばしば敵意をあらわにするようなキャラクターたちと共に語っている。彼らは大きな声では認めようとしないが、自身の立場が瓦解したとき、彼らがそれを理解していたことは明らかである。その辺縁(エッジ)からさらに先へ思考を進めようと試みるのではなく、彼らはソクラテスを嫌な名前で呼ぶ。「ソクラテス、あなたはみんなを混乱に陥れているだけだ。そこら中を真っ暗にして見えなくするイカ野郎だ」。

人が辺縁(エッジ)の上で思考する時、概念は常に変わり続ける。だからプラトンは、理論というものにたどり着くことは決してない。プラトンが、据え付けの概念セット a set of concepts that stay put を手にすることは、決してないのである。

アリストテレス

アリストテレスは、安定した概念が必要だとする私たちのニーズに配慮してくれた。そう、私たちはソクラテスのように、辺縁(エッジ)の上で考えなければならない。私たちはいかなる概念をも越え、ありきたりな決まり文句をも越え、考える必要がある。しかし私たちは、概念と理論をもまた、必要とするのである。

プラトンのようであることができるために、語や概念が変容を遂げ、あらたな意味の出現するがままにする let こと。他方また別の仕方で優れた概念を固定したままで保持(キープ)すること——これこそが今私がここで紹介している、新たな哲学（体験過程の哲学）の持つ力の一つなのである。

概念は、私たちに状況を再アレンジ rearrange させてくれる。概念は、飛行機を建造し、所与の羽翼が所与の対気速度でどれほどの重量を運び、浮遊したままでいることができるのか、正確に計算させてくれる。概念は、私たちの実践を改善させてくれる。概念は、世界を構築するのである！

アリストテレスは、どの分野においても、自身が創り出した、ないしは見出すことのできたもっとも優れた概念を捨てずに保持（キープ）した。既存の分野が存在しないところには、彼はそれを生み出した。彼は、私たちが現在もっている諸科学や学問分野の多くを創始した人なのである。2500 年たった今でもなお私たちは、彼が作ったものとそう大きく違わない概念のいくつかを使用している。

またそれと別口で、彼はある一冊の本——彼曰く、人がそれを使えば、何らかのものについてのすべての可能な定義を土台から揺るがすことができるという、もろもろの方策からその本は成る——を著している。アリストテレスは、ソクラテスとプラトンが示したことを知っていた。すなわち、真理は定義の中に存するのではないということを。すべての定義はことごとく打ち捨てられ得るのだということを。

しかし、測定すること measuring や考えること thinking という能動的活動性 activity の無いところに、いったいどのような仕方で、真理が存在するものだろうか？　そうではなく、アリストテレスは言う。私たちがものごとを理解することや、あらゆる理解可能なものごとの関連性は、自然（ネイチャー）と宇宙（コスモス）の能動的な秩序化過程の部分 part of the active ordering of nature and the cosmos なのだ、と。

知覚も同様である。もしあなたがブロンズ製のドラを打ったなら、あなたに得られるのは、正真正銘のブロンズの音であって、鉛や木の音ではない。しかし、ブロンズも木も、何かがこれを打ち、何らかの動物が耳を傾けることをしない限り、この音を持たない。ブロンズ単独には、何の音もない。そして、もしあなたがその音を測定（メジャー）し何か他のものと比較するならば、何か別の、しかし常に秩序的な何かを、得るであろう。

アリストテレスは自然を法則に「従う」ものとは考えなかった。自然は、組織化していく能動的活動性（アクティヴィティ）——それは生きて行くこと living や知覚すること perceiving をも含む——をそれ自らのものとして含んでいる、と彼は考えた。自然や私たちの思考には時間の流れがあるが、能動的な世界の秩序化の働きは、すべてが一挙同時的であって、[先後の関係や生滅のある]時間の内にあるのではない。自然や私たちの思考は、このような能動的な世界の秩序化の働きに合わせて、自らをアレンジしていく。Nature and our thinking have time, but they arrange themselves in accord with the active world ordering that is all at once, and not in time.

真理をつくるものは、「この」とか「あの」とかいうような[特定の]尺度（メジャー）や定義の仕方なのではない。そうではなく、能動的（アクティヴ）な理解すること、思考すること、知覚すること、そして生きて行くことといった能動的活動性（アクティヴィティ）こそが真理をつくる。概念や命題は、能動的活動性（アクティヴィティ）の単なる所産に過ぎない。

それゆえに私たちの思考の活動は、常にそれがつくり出したいかなる概念よりも優るものであり続ける、という重大な論点をアリストテレスは明らかにしたのだった（De Anima（『魂について』）, III-4-8）。

ソフィストのプロタゴラスは、有名な主張を残している。「人間は万物の尺度（メジャー）である」。アリ

ストテレスはこの主張に全く異なる意味を与えた。プロタゴラスが言おうとしたのは、すべてのものは恣意的であって、私たちは私たちの好むままの仕方でそれを構成する construct ことができる、ということだった。アリストテレスは言う。「プロタゴラスは重大なことを言っているように見えるが、実際は彼が言ったことは自明である」（Metaphysics（『形而上学』）,1053a36）。木は自分のことを測定（メジャー）などしないが、あなたが木を測定（メジャー）したら、その木は他の木よりは高く、月ほどには高くないということが、真。もしあなたがそれを比較するならば、それはまさに或る仕方では他の多くのものと異なるということが、真。動物たちからすでにして「万物の尺度（メジャー）である」。なぜなら動物は知覚するから。木は、自分が緑であって青ではないということを知覚していない。木は自らの色を「測定（メジャー）」（比較）しない。ただ動物のみが知覚し、それによって「測定（メジャー）」する。そして人間もそれを行うが、加えて、思考によって比較する。知覚することと思考することは、アリストテレスが「測定 measuring」と呼んだことをすることなのである。そこでは常に私たちは、秩序的な何かを手に入れ、真か偽である言明を手に入れる。このようにして、アリストテレスは自然（ネイチャー）と宇宙（コスモス）の秩序性を支持したが、その秩序を単に私たちが構成 construct しただけのものだとも考えなかったし、測定や思考の活動なくしてただそこに存在するものだとも考えなかった。そうではなく彼は、私たちと私たちの思考を、本来的な能動的「測定 measuring」として、また自然と宇宙（コスモス）が秩序化していく能動的活動（アクティヴィティ）として、理解したのである。

知覚も同様である。もしあなたがブロンズ製のドラを打ったなら、あなたに得られるのは、正真正銘のブロンズの音であって、鉛や木の音ではない。しかし、ブロンズも木も、何かがこれを打ち、何らかの動物が耳を傾けることをしない限り、この音を持たない。ブロンズ単独には、何の音もない。そして、もしあなたがその音を別のやり方で測定（メジャー）、すなわち比較するならば、やはり何か別の、しかし常に秩序的な何かを、得るであろう。

アリストテレスは自然を法則に「従う」ものとは考えなかった。自然は、組織化していく能動的活動性（アクティヴィティ）——生きて行くこと living や知覚すること perceiving、そして思考すること thinking といった——をそれ自らのものとして含んでいる、と彼は考えた。

真理をつくるものは、「この」とか「あの」とかいうような［特定の］尺度（メジャー）や定義の仕方なのではない。そうではなく、能動的活動性（アクティヴィティ）こそが真理をつくる。自然は、私たちを含み、私たちの測定活動を含み、私たちが思考すること、知覚すること、生きて行くこと、行動を起こすことを含む。概念や命題は、自然の中にいる私たちの能動的活動（アクティヴィティ）の単なる所産に過ぎない。

それゆえに私たちの思考の活動は、常にそれがつくり出したいかなる概念よりも優るものであり続ける、という重大な論点をアリストテレスは明らかにしたのだった[1]（De Anima

[1] アリストテレス『魂について』（中畑正志訳,京都大学学術出版会,2001,pp.154-155）を参

（『魂について』）,Ⅲ-4-8)。

ガリレオとデカルト

ガリレオは西洋科学の世界で偉大な前進を開始した。革新的な——一見、狂気とも思えるような——概念によって、すなわち自然界の森羅万象は数によって秩序づけられているという概念（コンセプト）によって。すべての秩序は、数学に還元され得る。しかしまた、ガリレオは実験にも信頼をおいていた。ご承知の通り、ガリレオは大学教授であったが、軽い球も重い球と同時に着地することを実証するために、ピサの斜塔から二つの球を落下させるという、公共の広場におけるスキャンダラスで非・学問的な行動のゆえに、ピサ大学から解雇処分を受けた人物である。彼はこうした類のことをやめようとせず、結局のところ宗教裁判で罷免を受け、終身軟禁下に置かれることとなったのだった。

デカルトは、明確に定義した単純な術語や構成単位（ユニット）から、概念や理論を作り出した。彼は言う。自分はどんなことについても、こうした理論をいくつか作ることができる、と。実験というものは、[理論の]構成 constructions にとって最も便の良いものを選ぶことを目的としてのみ、有用である。彼にとって科学とは、作り-上げられる（こしらえられた）made-up ものであった。彼が、非常に明確に示したのは、科学というものは仮説的であるということだった。

私たちが生活している世界は、科学によって理解され提示されるようなものである、とはデカルトは考えなかった。生活においては、彼曰く、彼は倫理的な人間であることを望み、ギリシアのストア派の系列に連なり、他者との間にあって、静かに礼節を保って暮らすことを望んだ。しかし科学は作り上げられることのできるものである。科学は、数学のような発明品のように思われる。それは、ある意味において算術や解析幾何学が完成しているように、完成し得るものだと、彼は考えたのである。デカルトは言った。自分は首尾よく道を歩んでおり、もし人々が２，３年の間、自分の平安を乱すことなく、ただそのままにしておいてくれたならば、個人的に科学を完成させることができるだろう、と（Discourse on Method（『方法序説』）,64-68)。

今日多くの哲学者が、科学というものを純然たる構成物 construction であると再び考えている。しかし、ガリレオとデカルトの科学が終わることも留まることもなく発展し続けているという事実は、実験なるものについて或る何事かを示してる。すなわち、実験は、私たち

照した。「作用するものは作用を受けるものよりも、また始原[原理]は素材よりも、つねに貴い」。

がその実験のデザインに用いた仮説的概念以上のさらなる細部、さらなる特殊な詳細、さらなる複雑性を与え返してくれるということである。自然が実験に対して与えてくれる応答（レスポンス）は、私たちが持ってきた概念や理論を解体 break up し、研究者をして辺縁（エッジ）の上に至らざるを得なくする。もちろん、データはただ「イエス」か「ノー」かを言うだけの時もあるが、人に戸惑いを催させる一群――それは新たなる概念へと導いてくれるさらに詳細な結果たちから成っている――をもたらす時の方が多い。10 年前は科学的な概念がただ一つ存在するだけだった所に、今や２，３の展開路線の中に 23 もの概念が生まれ、5 年前の概念はすでに使用されていないのである。

自然は、あたかもそれがパテであるかのように、あるいは存在するものでないかのように、私たちが仮説的に構成 construct するような何かなのではない。また、自然は、あたかもすでに或る一つの仕方で概念化されているのであって、それゆえ私たちはただそれを正しく手に入れる必要があるだけのものであるかのように、認知的システムに似た仕方で組織立てられているものでもない。自然は、10 年前に私たちの理論が語っていたものではない――それに私たちの理論が今語っているものでもない。自然の秩序は、認知的システムが有するような種類の秩序ではない。むしろそれは、いつも規則的で秩序的な仕方で、しかし私たちが持っている概念から演繹することができたよりも、より一層の複雑性を伴って応答してくれる、あの複雑な秩序なのである。

連続性 continuity、文化的差異 cultural differences、そして普遍性 universality

哲学では長いこと、人間存在を主に理性的なプロセス rational process として考察してきた。情動や欲望についても当然議論されてはいるが、人間存在はまず第一に、「２＋２」から「４」へと移行する結合の源泉であったのである。カントは指摘した。最初の「２」を保持（キープ）し、それを次の「２」と統一し、新しい統一すなわち「４」を生みだすような、統一作用的連続性 unifying continuity が存在しない限り、２＋２は単に、「２」、そして次の瞬間にもまた「２」、そしてそこでも未だにただの「２」があるだけだ、と。数の連なりは、保持（キープ）することと連続することとを必要とするのである。

（科学の世界では、この連続性は、今や純粋に理論的である。それは「理念化された観察者 **the idealized observer**」と呼ばれている。）

このような人間観は、大きなアドヴァンテージを有している。例えば、この人間観は、人間すべての個人の本来的平等性を暗に示している（インプライしている）imply。あなたは、アメリカ合衆国独立宣言における本来的「譲渡できない（不可侵）」「自明」な平等性の中に、それを見ることができるだろう。これについての歴史的素描を完了してから、体験過程「.....」のより広大な秩序に内属する仕方で、論理と平等性を保存することはいかにして可能か、という問いを私は取り上げるつもりでいる。

19 世紀、人間存在に関するこのような皮相な合理性の考え方に対して大きな反乱が巻き起こった。神話や文化の方が、合理性よりもはるかに深きを行くもののように思われた。文化や言語は常に、人間存在のからだや状況の中に暗在している［暗に在る implicit］が、私たちの生ける相互作用においては、私たちの体験過程は、より広くかつより複雑であるのが常である。しかし、私たち多面的人間存在のまるごと全体が、文化によって創造されたもの——様々な文化によって意味づけられているところのものであるかのように見える。さて、人間というものは平等などでは全く無いように見える。いかなる他の動物種の個体たちが互いに異なっている程度よりも、人間たちは互いに異なっているように見える。人間たちは、一つの種族などでは全くないように見える。人間たちは異なる文化ごとに、でたらめに異なった仕方で、眠り、食べ、住処を作り、子どもを育てるのだ。もしあなたがハンガリー人であったなら、ルーマニアの人々（そしてその他あらゆる文化）は、本当の人間性を発達させていないと考えるかもしれない。ドストエフスキーは、ドイツ人、ユダヤ人、そしてポーランド人は、表層的な魂しか持っていないと考えていた。

さて今や一般に、次のことは合意されている。すなわち、普遍的な人間の内容 content は存在せず、それがすべての文化においても人々に当てはまるであろうような、あなたが語り得るつまり概念化することができるような或るものは存在しない、あるいはあってもごくわずかである、と。

ヴィルヘルム・ディルタイは 20 世紀初頭に、こう考えた。もし私たちが自らの体験過程を伴いつつ、他者の体験過程の中へと入っていくならば、［人間の］徹底的な多様性にもかかわらず、「人間的なるものはすべて、原理的に理解可能である」と。二人の人間は、同じではないが、互いに互いを豊かにする enrich。

アメリカのプラグマティストたち（パース、デューイ、ミード）は、実践と理論が互いに影響し合うような仕方から、人がいかに思考し得るのか、ということを示した。

20 世紀哲学者の内の先駆者たち（とりわけ、ヴィトゲンシュタイン、フッサール、ハイデガー、サルトル、そしてメルロ・ポンティ、マッケオン、フーコー、デリダ）についてここで言うべきことは多い。彼らのそれぞれが、体験過程の「複雑性 intricacy」と私が呼ぶものの発見に対して、また概念的なパターンや文化的形式（フォルム）「と共に-かつ-それを越えて」考えることの発見に対して、何らかの貢献をなしている。

辺縁（エッジ）、.....、「私たちが-言い-得る-以-上のもの」、そして辺縁（エッジ）「から-語る speaking-from」また辺縁（エッジ）「から-考える thinking-from」プロセスに取り組むとき——普遍的に適用可能な、人間存在への或る理解が、今や再び見いだされてきたのである。そこでは次のことが明らかになる。すなわち、私たちは他のどんな文化に由来するどんな人——その

人はあそこに入り、あそこから来る体験過程を分化する、小さな一歩一歩から語る——にもついて行く follow ことができるということが明らかになる。その人はついでにあれやこれやを詳しく説明しなければならないかもしれないが、主要な大部分においては、私たちはついて行くことができる。人びとが文化集団の一部として語り、行為する時、あなたは他の文化を理解することができなくとも、個人が.....の中へと入り、その複雑性を分化し、そこから語るとき、それができるのである！

論理的結合の一例としての、本来的[2]平等性 inherent equality

私たちは「.....」と、２＋２＝４という鋭利な論理的明晰性との、どちらをも必要とする。それは単に数学にとって必要なだけではなく、私たちの理論的思考にとっても必要である。最初に、なぜ論理的にリンクした概念 **logically linked concepts** は、より多くのことができるのかを、明らかにさせてもらいたい。そこで私は、論理的であるとともに実験に基づく概念を、私たちはどのようにして作ることができるのかを示すつもりである。

以下の例は、論理的結びつきが、いかにして何か（例えば、普遍的な人間の平等性）を、確立させる（単に「人々は平等に創造された」と主張するだけであるより、もっと強力な仕方で）ことができるのかを示している。それはまた別の何かをも示すものであるが、これは後ほど議論されるであろう。

独立宣言の名高い文章の内、イタリック体表記の単語のそれぞれは、論理的かつ本来的に、他の全てのイタリック体の単語とすでに結びついている。あなたがそれらのそれぞれを、その他のどれからでも導出する derive ことができるということを、以下で私たちは明らかにしていこう。

> 「*われわれ we* は、以下の *真理 truths* を *自明 self-evident* のことと信じる。すなわち、すべての人間 men［*人間 humans* と読み替えよ］は *平等 equal* なものとして創造されたのだということを。*その創造主 their creator* によって、*譲渡できない権利 unalienable rights* を授与されているということを。そしてそこには *生命 life*、*自由 liberty*、そして *幸福の追求 pursuit* of *happiness* が含まれているということを。」[3]

---

[2] 訳注）以下、「本来的」は inherent/inherently の訳語である。得丸さと子『ステップ式質的研究法——TAE の理論と応用』（海鳴社,2010）105 項を参考にした。

[3] 訳注）アメリカンセンターJapan のホームページで提供されている独立宣言日本語訳を参照した。2019 年 10 月 25 日閲覧。
https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2547/

ジェファーソンが行っているのは、単に一つの事柄を次から次へと主張していくことではない。そうではなく、それぞれのイタリック体の術語は論理的に他の全てを暗に指し示しているのである。あなたがそれら[イタリック体の術語]の中のどれでもいいがどれか一つに入っていけば、その中にはすでにして埋め込まれた built-in[イタリック体の術語の]残りの全てを見出すだろう。例えば、「*譲渡できない unalienable*」を取り上げてみよう。財産は、寄付することが可能である。なぜなら、たとえその財産がなかったとしても、あなたは人間であることには変わりないからである。つまり、財産は譲渡可能 alienable である。しかし「*譲渡できない権利 unalienable rights*」は人間の本性 human nature[4]において本来的なものなので、*人間 humans* にとってそれらを抜きにすることは、論理的に不可能なのである。私たちは、*人間 humans* であることによってこれらの権利を有しているのであるならば、これらの権利に関して、私たちは明らかにみな*平等 equal* である。また逆に言えば、*人間 humans* であるというだけで私たちが有するものは何であれ、*譲渡できない unalienable*。「*創造主 Their creator*」とは、それが何であれこの本性を私たちに与える何かである。さてここで「*幸福 happiness*」なるものが、「これ」とか「あれ」というように[特定のものとして]定義されてしまったとするならば、そこにはその他のものを*追及 pursue* する*自由 liberty* など存在しないことになるだろう。従って以下のことが論理的に帰結する。すなわち、「*幸福 happiness*」とは必然的に、それが何であれ*人間 human* が*追及 pursue* するものでなければならず、また「*追及 pursue*」とは、何であれ*人間たち humans* が*幸福 happiness* に関して行うことを意味するのでなければならず、また「*自由 liberty*」とはまさにこの*譲渡できない unalienable 追求 pursue* の権利なのである。そして、これらの概念のそれぞれは、他のものをすでにして巻き込んでいる involve から、これらのつながりが現れるのである。このつながりは、他のものに依存していないがゆえに、「*自明 self-evident*」なのであり、このことはすなわち究極的には*真理 truths* が何であるかということであり、*真理 truths* が意味しているものなのである。そして私たちは*人間 human* であり、このことを今語っているところのものである。

２，３の概念がこのような仕方で論理的に相互に結びついている時、人はそのような概念たちに向かって質問をしてみることができ、それらの概念は答えを生みだすことができる。だからジェファーソンは、概念たちに向かって、「*政府 government*」とは何であるか論理的に導出することができるか（４を２＋２から導出するように）尋ねている。

> 「これらの権利を保障するために、人々の間に政府が設立 institute されるが、その正当な権力は、統治される者の合意に由来する。またいかな

---

[4] 訳注）”human nature”は、ジェンドリン『セラピープロセスの小さな一歩』（池見・村瀬訳,金剛出版,1999）34 項を参照しつつ「本性」とした。また、「本性」も「自然」も英語では同一の語であるため、訳文では「本性」「自然」と表記した箇所がある。

る形態の政府であれ、これらの目的に害をなすようになったときにはいつでもこれを改め、ないしは廃止し、新たな政府を設立すること、これは人々の権利である。」[5]

これら論理的にリンクした概念は、政府とは何であるかを言い得ているだろうか？　統治者は、他の者たちの上に権力を有する。が、これでは単純に平等性を侵害してはいないだろうか？　いかにして公正な政府なるものが、譲渡できない権利と平等性から、論理的に帰結し得るのだろうか？　だから、公正で正当な政府は、神から定められた、あるいは受け継がれた、のではあり得ない。それは設立されたものでなければならず、かつその設立は、当然、平等な人々によって、であるに違いない（すべての人は平等だから）。だから人々に及ぶ政府の権力が正当であるならば、政府を設立した平等な者たちの譲渡できない権利に、その権力は由っているに違いない。

しかし、何故平等な人々はそのようなこと[政府の設立]をかつて為そうとしたのだろうか？　ああ——政府は人々の権利を保障することができる（共同の防衛 common defense を提供することと、他者の権利を侵害しないよう私たちの各々に制限をかけることによって）[というそのためである]。さらに、他の事が論理的に帰結することを確かめよう！　もし政府がこの二つの事[1 共同の防衛の提供、　2 他者の権利侵害防止のための制限]をうまく遂げられないなら、その政府には何の有効性もない。平等な人々にはこれを「廃止する」権利がある。

この文章の一つ目のパート[「われわれ we *は*…」から始まる文章]にある言葉から、「政府」を導出することによって、ジェファーソンは革命の権利を論理的に導出することができたのだった。

長い連なり（チェーン）のまるごと全部を、これらの概念のうちのそれぞれ一個ずつから、論理的に導出することができる。連なり（チェーン）のまるごと全部が、それら[訳注：ひとつひとつの概念]の各々の内側に巻き収まるように curled up、それら[訳注：ひとつひとつの概念]は皆、論理的に結びついているのである。

ジェファーソンは、1 世紀の長さを越えてこの種の思考を発達させてきた哲学に、非常によく精通していたので、この文章を書くことができた。

有名な「権利の宣言」（数年後の 1793 年、フランス革命の間に発表された）は、いかにこれ

---

[5] 訳注）同じく、アメリカンセンターJapan のホームページで提供されている独立宣言日本語訳を参照した。2019 年 10 月 26 日閲覧。
https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2547/

[独立宣言]と異なっているかに気づいてほしい。

> *フランス政府は、ここに宣言する。すべての市民が今後以下の権利を有することを。*
>
> *・1（市民の権利#1）*
> *・2（市民の権利#2）*
> *・3（市民の権利#3）*
> *・4（市民の権利#4）*
> *・etc.*

政府によって与えられた権利と比較して、本来的な権利の方が、どれほど安全で確実かということを、私たちは感じることができるのはもちろんである。あなたは本来的権利を失うことはできない。[これに対して]政府は、自らが与えたものをいつでも取り消すことが出来る。

しかし、この例は、哲学の概念的側面がもつ力（概念の内側を分析・明確化し、そうすることで、概念は論理的に結びつくことができるという）を明らかにすることをも意図している。政府についてジェファーソンの帰結が導き出された時、ここにさらなる帰結が論理的に導き出てくることが可能なのだ。

ジェファーソンが彼自身に尋ねたのと同じように（「このリンクした概念たちとの関連において、政府とは何であるか？」）、ここでは他のどんなものについても、尋ねてみることができる。これらのリンクした概念から見るならば、心理療法とは何であるか？　明らかに、心理療法（サイコセラピー）とは、人間が、セラピーの前よりも、もっと追及する pursue（この言葉が含む上述の全ての意味を伴って）ことができるようにするような何かでなければならない。「セラピーtherapy」という言葉は、癒すこと healing を意味する。だから、私たちがジェファーソンのしたのと同じように、論理に作動してもらうこととするならば、それが人の本来的な本性（ネイチャー）a person's inherent nature を最大化あるいは少なくとも復活させるときに限ってのみ、それはセラピーなのだと言える。そしてこの本性（ネイチャー）に関して、私たちはいかなる内容（コンテンツ）［中身 content］についても無知なのであって、[知っているのは]ただ平等性と、追及の権利だけである。よって次のことが帰結する。すなわち、心理療法はまず第一にセラピストとクライエントとのあいだに、人の本来的平等性を行動で示し enact、最大化するのだということを。だから心理療法は、クライエントが自らの平等な本性（ネイチャー）をはっきりと理解し realize、行使する exercise ことを可能にするものでなければならない。こうしたほんのわずかな論理的にリンクした概念でさえ、多くの事へと私たちを導いてくれることに気づいてほしい！　それら[論理的にリンクした概念]は、どんなことでも（例えばセラピー）それが何であるかを明確にする上で、助けになってくれるのである。

さらに私たちは続けていくことができる。平等性は、幸福を追求する平等な権利を暗に示しているが、これが論理的に意味するのは、誰かの追求の権利を制限しないようにするため、幸福[の内容]を未定義 undefined のままにしておかなくてはならないということである。だから、セラピストはいかなる内容［中身 content］をも押しつけることはできない。もしそうしたなら、そこには追及の平等な権利は無いことになるだろうから。心理療法は、人の追及の能力を開発せねばならない。あなた自身が心理療法を「導出」してみたとして、そのやり方について熟考し、私が言及した二つの秩序の両者が、今共に働いているということに気づいてほしい。つまりリンクした概念の論理が働いているが、それと同時に、心理療法、人生、そして人々についてあなたに感じられる体験的な意味 your experiential sense、すなわち「.....」（論理的推論 logical inference はこの「.....」を明確に言い表す助けになってくれる）もまた、働いている。論理的推論はあなたがここに持っている体験の塊にがぶりと「かみつく bite」が、それ単独ではさらなるステップを創造することはない。あなたは、また同時にあなたの体験から語っている speak from のではないような何物も、それ[論理的推論]に語らせようとはしないだろう。あなたが求めるのは、それ[論理的推論]が、あなたの体験を明確に言い表すこと、すなわち、あなたの体験が、あなたの言わんとすることへと「流れ込み flow into」、よりいっそう「開示され opened up」、あなたが言うことによって推進 **carried forward** されることである。多くの場所で、わたしは「推進」（「から語ること」「流れ込むこと」）についてかなりの分量を割いて述べているが、それらは定義することが決してできていない。——なぜなら、それらは体験と定義のあいだの、体験された関係性から語るからである。

多くの人が教わってきたような思考においては、概念的な明確化は、体験的な意味感覚をしばしば制限し、「殺す」ことさえある。こうしたことが、最良の思考であったためしはかつてない。哲学者たちが新たな、いっそう深きを行くような思考へと到達することができたのは、彼らが論理的推論と、世界の中で相互作用的に生きる人間有機体の意味感覚の、両者を共に用いていたというただそれだけのためであった。

いかにして論理的秩序と体験的秩序 **the logical and the experiential orders** が、共に働くのか。これが主たる新たな哲学的問い（古の問いの新バージョン）である。

私たちは、こうした合理的な概念というものが、悪いものでははないということは知っている！　しかしそれは、私たちが考える必要のある、人間の多面性を考えるには、あまりに皮相なのである。間違いなく、私たちは、もっと良い概念、もっと良い理論を必要としているが、それはただそれだけでなく、本来的にリンクした概念から構成されるような理論をきっと含むものである。これが概念を作り上げる唯一の方法というわけではないが、極めて重要な方法ではある。

しかし、私たちがまずもって体験過程から思考した、その後にのみ、新たなより良い理論・

リンクした概念たちは、現れることができるのである。こうした思考の初期段階ではまだ、こうしたリンクした概念たちが、無い。そうしてそれらを構築したときには、私たちは論理と体験過程の両者を伴って、それらを用いなければならない。

概念や論理は、決して、体験や状況を包摂しはしない。.....を実際に試してみてほしい。

前や後ろへのジグザグ動き A zig-zag movement が、それらの間では必要となる。論理と、辺縁(エッジ)にある.....との両者と共に動いて行くことは、いかにして可能なのだろうか。これを明らかにさせてほしい。

体験過程の哲学。論理的・体験的秩序　THE PHILOSOPHY OF EXPERIENCING:THE LOGICAL AND EXPERIENTIAL ORDERS

自然（ネイチャー）に内属する人間 **Humans within nature**。

上述のことから、少なくとも二つの結論を、道連れとさせてほしい。

- １）論理的な秩序は、より広大である体験的秩序に内属して用いることができるが、そうすることによって論理的推論は体験的な意味感覚(フェルトセンス)（すなわち「.....」）を明確にし、展開することができる。私たちは、論理的箱(ボックス)[6]を使用することもできるが、それを解体しリメイクすることもできる。
- ２）私たちの思考や、”ひと-と-からだ”persons-and-bodies は、自然(ネイチャー)の一部である。自然(ネイチャー)は、私たちがそれを分析したり構成したりする、ただそれだけの何かなのではない。私たちは新しい方法で、生けるからだ living body について考えたいのであって、そうすることによってわたしたちは、それらのうちの一つが自らのものであるのはいかにして可能であるのかを把握することができる。

１）より広大である体験的秩序に内属する論理的秩序

哲学者たちは（プラトンとは違って）自分たちが、.....（意味感覚(フェルトセンス)）から語っているという事実を認めていなかった。彼らは、「純粋な」論理や観察が自らの基盤であると主張するのが常であった。しかしながら、理論によって論理的に現に明確化されつつある.....にこそ、すべてのものは依拠しているのだということを、私たちは知る事ができる。.....はやって来る。状況や宇宙(コスモス)における相互作用であるところの私たちのからだの体験過程に、或る仕方で

[6] 訳注)「箱（box)」は、既存の概念、既存の構成単位（unit）を意味するものと思われる。「ソクラテス」の節を参照。

私たちが付き添って attend いるならば…。

ジェファーソン（や彼が基盤を置いていた哲学者たち）は、人々はその理性と本質的価値において、本来的に平等であるという、深い、また徹底した感覚を持っていた。彼らの仕事の全ての言葉が、これ[本来的平等性への感覚]を伴っている。他の哲学者（たとえばホッブズ）は、ちょうど同じく論理的であることはできたが、彼らが明確化したのは、人々や物事についての[ジェファーソンらとは]異なった感覚であったし、たどり着いたのも異なる結論であった。論理は、意味感覚を明確化し、これを推進し、そこから一つの世界全体を構築するものであるが、論理が意味感覚を限定 determine するのではないのである。

他の例を挙げよう。フロイトは、生きものは自らをバランスの取れた状態に保つものであるという、当時流通していた概念的前提から始めた。彼の全ての概念は、彼の中心的仮説――すなわち、それ自らによって自らの緊張とニーズを充足することによって自らのバランスを保とうとする「恒常的 homeostatic」な有機体 organism という中心的仮説――を明確に表現している。彼はこれを「快楽原則」と名付けた。これが満たされない時にのみ、有機体は「現実」、すなわち他の個人や外的世界に、出遭う encounter よう駆り立てられる。この「現実原則」は、二次的に、仕方なしにやって来るものである。フロイトにとって生きものは、環境や他の生物と本来的相互作用的な関係をもっているものではない。フロイトにとって生きものは、本来的に自閉的なのであって、単に必要から圧力をかけられて、他者にまみえるよう強いられるだけなのである。フロイトは、ある短い論稿で、未発達ではあるが論理的にリンクした概念が、いかにして、私がジェファーソンの文章で示したようなパワーを獲得しているかを示している。たった数ページの後、彼の論理的にリンクした概念たちは、芸術とは何かを導出 derive することをフロイトに可能とし、宗教や教育とは何であるかを導出することを可能とし、知覚、記憶、その他たくさんのことを導出することを可能としたのである。私たちは、この種の「導出すること」のもつ興奮を、高く評価する必要があるし、同時にこのような「導出すること」は前提や論理に依拠しているのみならず、現に明確化されつつある意味感覚にも依拠しているということも理解する必要がある。たとえこの両者が明言されていようといなかろうと。

フロイトが当初仮定したような自閉性は、彼の理論的概念のひとつひとつの中へも守り継がれており、精神分析家一派の実践や、（人間におとらず）私たちの社会全体のものの見方に、計りがたい影響を及ぼしている。精神分析は素晴らしく念入りに作られた、パワフルな理論であるものの、しかし私たちはそれを体験化 **experientialize** したときに限って、これを有効に活用できる。フロイトの概念は、私たちを或る体験へと導く上で、計り知れない価値がある――しかしその際、私たちは、概念が、ではなく、体験が私たちをさらに先へと導いてくれるようにしなくてはならないのだ。「体験化」という語によって私が言いたいのは、理論の論理性が私たちを何かへと導いていくとき、理論から出てきた結論を単純にはアクセプトしないということである。その代わりに、その結論が名付け、位置付けた体験の方に

私たちは目を向ける。その時、私たちは体験（単に、理論によってすでに名付けられ、分割され、定義されただけのものとしてのそれではなくむしろ、.....、すなわち意味感覚としてのそれ）によって、さらに先へと導かれていく。.....から、理論からはどうしても出てこなかったような様々な仕方で、私たちはさらに先へと思考していくことができる——たとえまさにその理論こそが私たちを当のその体験へと導いていたのだとしても。

私たちは論理的なステップと、体験的秩序（私たちが考えようとしているどんなことでも、それの体験的秩序）との間を、「ジグザグする」**”zig-zag”**ことができる。このことは、私がまさにここで据えようとしている概念や主張にも当てはまる。“私たちは、論理と意味感覚のあいだを前や後ろに「ジグザグする」ことができる”という私の主張への応答として、たった今、あなたのからだの真ん中に、何がやって来ただろうか？　もたらされたのは、解放し開かれた感覚だろうか？　あるいは重さ、興奮、落ち着かなさ、それとも他の何かだろうか？　ちょっとの間、それと一緒にいて、そうして、それがあなたにさらなるステップをもたらすがままにしてみてください。あなたは、あなたの意味感覚から、私が言ったことから論理的に帰結することを越えたところへと、たどり着くかもしれない。また私は私自身の意味感覚から、同様のことができる。そして”そこ”から私たちは、論理的推論に再び仕事をしてもらえるようにすることができる。

論理的推論と「.....」は、異なるさらなるステップへと導いてくれる。両者は相伴って、ニュータイプの理論や概念的モデルへと導いてくれる。多くの哲学者は、もはや概念的モデルを構築したりしていない。彼らはもはや、概念的構成体 conceptual constructs を定義し、さらなるステップを導出しようとは欲しない。だから、論理的推論が提供し得る、はるかを行く明確化 far-going articulation や、内的結びつき internal linkages を彼らは失っている。他の者たちは、論理以外の何物にも携わらず、自分自身を含めたすべてのものがデジタルな構成物 constructions 以外の何者でもないと考えている。

プロセスモデルにおいては、論理的にリンクした概念が、生けるからだ（！）、覚知 awareness、行動、知覚、その他多くの事柄を——自らが扱っている当のものから（それを囲い込んだり、縮減してしまうことなく）語ることができるような仕方で——導出するが、それを行うそれぞれの時に、人の心を湧き立たせるものがある。概念的モデルの有するパワーは、より広大な体験的秩序に内属して、使用され得る。私たちは明確化されつつある意味感覚を伝達 convey することができるが、概念的「モデル」それ自体としては、あたかもそれが単に論理的なだけのようで、月並みに見える。しかし、すべての概念はまた体験的でもあるのであって、そうして人がそこから異なった仕方で進んで行けるよう、人をしてその背景にある体験的な側面へと導いていくことができるのである。

論理と体験の秩序が共に機能する別の方法は、私たちが或る何かを他の或る何かと交差する **cross** ことである。概念ならば、その二つは互いに、論理的に適合し合うことはないかも

しれないが、意味感覚(フェルトセンス)ならば、交差することができる。結果として生じる意味感覚(フェルトセンス)は[それぞれの意味感覚(フェルトセンス)の]共通分母ではない。交差の結果は、交差した二者以上に複雑である。いかなる意味感覚(フェルトセンス)もある種の真理を有するが、なぜなら、それは人間有機体がこの世界で経験することのできる何かだからである。交差の結果もまた、この種の真理を有する。例えば、フロイトの"自閉的自己平衡化"は、意味感覚(フェルトセンス)として、すぐさま他の多くのものと交差したことだろう。そのうちのいくらかは、他者や環境を巻き込むことになっただろう。というのも、これらは私たちが感じ、行うほとんどすべてのものに暗在 implicit しているからである。或る他の体験と交差した時、自閉的な意味感覚(フェルトセンス)は、なんらかのつながり linkage を発達させたことだろう。つまりそれは、他の物事との関係性において、よりいっそうの発達を遂げたことだろう。それゆえ、それはもはや自閉的であるのではない（し、それ以外のいかなる概念も、その意味感覚(フェルトセンス)が他のものと交差している程度において、自閉的ではない)。しかし現段階でこのことは、前約束的な覚え書きであるにすぎない。プロセスモデルの最後に達してのみ、このような思考のあり方は、十分な概念の発達を果たすのであって、そうすることで、それは自己自身へと転回し自己自身から語る時、いかにして交差と推進が働いてくれるのかを伝えることができるになる。

この種の真理は、さらにさらにと展開していくことができる。私たちは、論理的推論の長い連鎖が導いていく所を目の当たりにすることができ、そこで私たちが使用していたまさにその概念を解体することもできる。このような解体 breaking は、恣意的なものではなく、体験的・状況的な、からだ的に生きられた秩序 bodily-lived order（概念的箱(ボックス)より広大かつ複雑な）の中で導かれているものである。この種の真理を追究するために、人は始めることができる——どんな辺縁（エッジ）でも、どんな意味感覚(フェルトセンス)でも、人間有機体によって実際に体験されている何であれその未だ明瞭ならざる辺縁(エッジ)、それと共に。

最良なのは、明瞭である以上の仕方で私たちを魅了する／ないしは悩ませる何か、それをもっとよく明確に表現できたらと私たちが願う何かと、共に始めることである。そのトピックは、当初において深遠であるよう見える必要はないが、人が体験したことのある人生の何らかの分野・領域に属するものである必要はある。例えば、山々を行く初めての長旅の最中、あなたの見た何かが——何かははっきりは分からないが、それがあなたを落ち着かなくさせたとする。このときあなたは大丈夫と先へ進んで行こうとするかもしれない。しかし、経験豊富な同行の登山ガイドが、「止まった方がいいですね、この道の何か——何かはっきりはわからないのですが——が今不安なのです」と言ったなら、あなたは「気にすることないですよ、先へ行きましょう」とは言わないだろう。あなたが体験を重ねた或る分野で、今はまだはっきりしない何かが、あなたの人間有機体を悩ませたり、魅了したのなら、それを明確化すれば意義の大きいものとなるだろう、今はそれがどれほど私的で自閉的なものに思われたとしても。*理論構築*に関するクラスで私は、いかにして主張を形成し得るかということや、皮切りとなる意味感覚(フェルトセンス)を手に入れ、そこから語るための易しいステップを明らかにしてきた。それは私たちが新しい概念を形成することを、可能にするものである。（実際は、

概念より偉大なその複雑性に付き合い、そこから語ることは易しいが、新しい概念を案出することは非常に困難である。私たちは古いなじみの概念に逆戻りしてしまいがちである。）そこには、短い具体例と一緒に、この種の思考のための、具体的に特定されたいくつかの手順が展開されていることが、おわかりになるだろう。この具体例は、*A Process Model*（400ページものもっと長い例であるが）において入念に練り上げられている。

それがそのように意図されていようといまいと、概念に両方の仕方で働いてもらうようにすることによって、人はまた、どんなテクストからも思考していくことができる。私はこのことを *Experiencing and the Creation of Meaning*『体験過程と意味の創造』（ペーパーバック版、1997）第VI章で、ここで素描したことの多くと併せて、論じている。

２）自然（ネイチャー）に内属する思考、相互作用、そして、ひと-からだ

昨今の科学では、動物や植物は単なる機械として理解されている。動植物は、自ずから[互いとの]結びつきや固有の意義を持っているというよりも、全ての科学的対象（オブジェクト）object[客体]が現在研究されているのと同じく、あたかもそれらが単に私たちのもの、つまり人工の時間空間的な構成体であるかのように、研究されている。いわゆる「理念化された観察者」は、カントの言ったように（４をつくるためには、最初の２が、次の２まで保持され持ち越されねばならない）、すべての時間と空間の結びつきを、科学の対象（オブジェクト）とするどんなものの上にも、外側から押し着せる impose。万物は、本来的に意味を持たないかけら bit（そのかけらたちの結びつきは外側からもたらされる）から成るとされる。私たちの科学では、万物は（あなた自身もまた）、時空間の座標点上の情報に翻訳されてしまう。点たちは、自ずから互いに関係しあっているのではない。「観察者」がそれらを関係させるのである。もちろん、それらを関係させることができるのは、互いに無関係な点たちに結びつきをもたらすことのできるよう、観察者がそれ自らの内的連続性を有する或るプロセスである時のみである。もし私たちや私たちのからだが科学の対象（オブジェクト）であると仮定するならば、私たちはそのプロセスを見失ってしまう。そこでは、私たちは、私たち自身を理解することもなく、科学を理解することもない。そこでは、人間の世界は自然（ネイチャー）と結びつきを持っていない。人間の世界は、ただ根もなく浮いている。それは、「歴史」「言語」、あるいは（ある哲学者たちが近々よく言うように）「言語共同体 language community」――これが意味を持たない対象（オブジェクト）に意味を「あてがう assign」のであり、また［言語共同体］それ自体が意味を持たない対象（オブジェクト）（このオブジェクトはどういうわけかお喋りする）から構成されている――と呼ばれているものである。

以上のように考える代わりに、次のように述べることが安全な主張だろう。すなわち、私たちは自然（ネイチャー）（宇宙（コスモス）、全体 the whole thing.....）の部分である――なぜなら私たちはここにいるから、と。いのちや動物を含む自然（ネイチャー）は、そのうちの或るものが私たちであるような、どういうわけか是の如きものである。生けるからだは、機械――それは結びつきが[外から]付与

されねばならない、観察された空間的かけらから構成されている——ではない。生けるからだは、私たちのからだがその[生けるからだの]うちの一つであるような、どういうわけか是の如きものなのである。

この「どういうわけか是の如し somehow such」ならびに、この内的連続性は、明確に表現することが可能である。そうするために私たちは、すべての箱（ボックス）、私たちが学習したすべての概念的型（パターン）をすすんで開こうとしていなくてはならない——そうすることで、それらが消えてなくなるわけではない。それらは.....と交差し、.....を再概念化し、より一層複雑性を増していくであろう。

私たちは、私たちのからだの相互作用的生の連続性を、意味感覚（フェルトセンス）が、生の次なるかけら the next bit of living を暗に指し示す（インプライする）（をしきりに求める、に傾向する、を必要とする、を要求する、を引き起こす句を形成する.....）、その仕方の内に見出す。人間のからだは、言語で-凝らされている language-elaborated が、すべての生けるからだは、自身の生の次なるかけらを暗に指し示している（インプライしている）。そして生けるからだがそこで為すこと、あるいは言うことは、からだの暗なる指し示し the bodily implying を明確化 articulate（開示 open up、空間化 spatialize、明在化 explicate.....）するものであり、同時にそれは新たなからだの暗なる指し示し a new bodily implying でもある。この連続性は、時間（の一種）をつくり出す。明確化すなわち明在化 explication することが、常に同時に、さらに先へと生き行くことであり、さらなる体験の進行過程でもあるような仕方——私たちはそのような仕方から、新たな理論の明確化を開始することが可能なのである。